

『下克上寝取られ3』

クラス最強のヤンキーが
いじめていた教師に美少女恋人を巨根で寝取られる！

寝取られセックスの前で
短小チ○ポを握る所をギャルたちに見られ地位崩壊！

玉子王子 著

1章 彼女の相談を聞いておけば……

妊娠したかも、と彼女に言われたのは一月も前だった。

——俺、覚悟決めた。

高校を辞めて、働く事にした。

石井は、いわゆるヤンキーである。

うさぎ高校でも最強クラスと噂される喧嘩の腕を持ち、同時に勉強も出来ることで女にモテもてだ。

それでも、本命の彼女片末マリナと、もう一人幼馴染だった少女以外とは付き合っていない。

モテる度合いからすれば相当まじめなほうのつもりだった。

屋上。

普通危ないので封鎖しているが、石井が頼んで教師らにあけてもらった。

それで、一躍生徒らの英雄となった。

有力なヤンキーの要望を断ると教師でもいじめられるから、断れないのだった。

実際の所、石井は一人の若い男性教師をしつこくいじめていた。

何が気に食わなかったのか、もう覚えていないほどだ。

——まあ、雰囲気だな。いじめられるタイプだあいつは。どこいっても。

多分、学生時代もそうだったのだろうと思う。

「お前ら、来月から税金値上げな」

男三人が横に並んでいる。

クラスのオタク連中だ。

全員、下半身丸出し。

「っていうかこいつら、無駄にチンチ○デッカーよ！」

ギャル。

三人ほどいるクラスの派手な女。

それらが、しゃがんでオタクたちの股間を観察していた。

一人が、オタクの一物を握る。

「キ○タマ縮んでるから、チンチ○もだろ？ でもブラブラしてる、彼氏の立ったのよりデッカーよこれ！」

とんでもない事をいう。

やはりギャルなどと付き合うものではない。

その点、マリナはこんな場面についてなどこないし、来ても余所の男の汚い部分に手を触れたりしない。

見もしないだろう。

ずっとそうあって欲しいと思う石井。

チラ、とオタクらの丸出しの下半身を見る。

隠すことを禁止したので、手は尻の横。

ブラブラと、風に吹かれても動きそうなサイズで垂れ下がっている。

——あれで縮んでるだと？

ギャルたちと笑っている石井だが、内心は別だった。

必死で勉強して取った点数より、昼寝していた連中の点数の方が遙かに高いのを見たときのように、気分が悪かった。

——俺の立ったのより数段でかいよ。

短小包茎という三重苦を背負っている。

——でも、こいつらは童貞。俺はやりまくり。俺のチ○ポの方が価値があるから、入れさせてもらえるんだ。

そう思うと、少しだけ気分が楽になる。

税金と言って、結構な数の生徒から金を取っている。

うさぎ高校だけではなく、他の学校からも。

それを、一律値上げするつもりだ。

それで、しばらく食いつなぐ。

その間に、商売でも始める。

何とかマリナを食わせてやらねばならない。それに、腹の子供も。

働くと言っても、ヤンキーの先輩らのように肉体労働などやってられない。

頭がいいのだ、何かできるはずだ。

が、最悪、それが通じなかったら……

——その時は肉体労働だ。

大事な彼女のためなら、耐えられる。

覚悟が決まった今、話を聞かねばならない。

聞けば、いうつもりだ。

「ありがとうってな」

口を押さえる。

と、ギャルの笑い声。

「やべえ、超デケエ！」

「や、やめて……」

「デブ太が命令か？ キ○タマ蹴る」

「わ、わかったから」

「お前も気持ちいいんだろ？」

真ん中の太ったオタクの一物が反りたち、それをギャルがシコシコと音を立てて手コキしている。

巨大なものを見上げて、口では何だかんだ言いながらも一心不乱、玉までご丁寧にプルプルモミモミと揉み上げている。

オタクも嫌がるような言動を取りつつも、舌を突き出して気持ちよさげだ。

——なんだ、自分でやらせりゃいいんだよそんな連中。毎日やってんだろどうせ。

石井は、それはもう数年前に卒業した。

それこそ、選ばれた男というものだ。

この場のオタクや、いつもいじめている教師井上など、男のうちに入らない。

多分井上は童貞で、自分よりさらに一物が小さいだろうと石井は思っていた。

ただ、教師だから流石に脱がされない。

同じ年なら、オタクと一緒に四人並んでいただろう。

そして一人小さいので、笑いものになる。

——……笑いものか。

小さいのは、笑われることか。

舌打ちしたくなる。

拍手。

ギャル二人が手を叩いていた。

真ん中の一人が、デブの巨根をしゃぶっている。

左右の二人も、ギンギンに立っている。

ビクビク震える肉の棒は石井の肉指とは別の物体のようだ。

このまま行けば、真ん中の二人はし始めかねない。

それに刺激されて、他の四人も……となると、オタクの癖に巨根の三人が童貞卒業となる。

「お前ら、いい加減にしていくぞ」

どうでも良さそうに、務めていう。

真ん中のギャルが口をチュボンと離す。

「はい石井」

「え、でも……」

「うふふ、お客さん、御代貰いますね」

立ち上がり、オタクの肩を叩く。

す、と気づかれない程度に距離を詰めるギャル。

オタクの太股の間に、自分の足を入れる。

「え、お金なんて……おぐっ！」

「はい、集金完了」

「そっちの金かよ！」

肉玉。

ギャルの太っとい太股がオタクの太股の間に突き上げられていた。

膝と違い、致命的な威力はないが力が逃れるのも難しい。

そのギャルの慣れた金蹴りでグチっ、と自分の肉玉が音を立てたようにオタクには聞こえた。

——な、何でキン……ああっ、し、死ぬ……女に、キ○タマ……畜生なんで……

「ぬうううう」

「ぎゃはははは！　ぬうううっだって！」

「キ○タマ蹴られて泣きそう！ 男って大変ねえ、そんなにキ○タマって痛いのか？」

「お前らも蹴らせろや！ 潰れてもナノテクで治るからへーきへーき！」

「やめて！ おぐっ」

腰を引く左のオタク。

右のオタクが逃げようとする。

が、ギャルに腕をつかまれる。

——女の力ぐらい振り払えねえのかよ、玉無しどもが。

玉のほうは同じぐらいの大きさだ。

竿は速攻で縮んだが、それでも立った石井のより大きい。

その下で引きあがった肉玉に、ギャルの拳が減り込む。

「あぎいいっ！ ぐっ！」

「あは、二回いったね」

「なんか動いてて上手く行かなかったから。それにキ○タマって二つあるし！」

ゲラゲラ笑いあうギャルたち。

あのまま盛り上がれば屋上で三人のオタクに跨ることもあっただろうし、一度興が乗るとこの始末だ。

股間を押さえて転がるオタクたち。泣き声を上げている。

「金忘れるなよ」

「忘れたらまたキ○タマだから」

「きゃは！ 今日のはサービスってことでありがたく受け取っといてよ！」

大笑いしながら、さっさと屋上を出る石井についてくる。

「ていうかデブ太だけ手コキまでしてもらってラッキーだったんじゃないか？」

「どうでもいいっしょ。それより……石井」

後ろから抱きつかれる。

手が腹の辺りに来る、股間に来ないように押さえる。

「ねえ、今日は1発ハメようよ。そろそろさ」

「俺はマリナー筋なんだよ」

「って、久美華ともやってんじゃない」

幼馴染。

母子家庭で、相手の母親がルーズだった。

おかげで十二歳まで一緒に風呂に入るような仲で、自然とお互いの体への関心を満たしあった。

初めての女で、特別な相手なのだ。

それでも、「彼女」にはならなかった。

マリナとであって、本当の「好き」の意味を知った。

久美華は歪んだ兄妹のようなものだ。それでも実際には他人だし、かけがえのない相手でもあるのだ。

恩人でもある。

彼女が他の男子と比べて、石井のものが小さいというかあまり成長しないことを教えてくれた。
おかげで、短小だということを周りに気づかれずに済んだ。

知らなければ、影響力からしてやりまくっていただろう。

——……でも、そのほうがよかったかもとも思うな。

小さいから馬鹿にされる立場でもない。

というか、さっきのオタクたちは「大きいと馬鹿にされる」だろう。

所詮立場で物の値打ちは変わる。

なら、小さい事など知らずに、気にせずにやっていた方がよかったのではないか。

だが今さら、不特定の相手に出そうとは思わない。

「石井のなら、あいつらのよりでっかいでしょ？」

うさぎ女子高の空手部主将のことを思い出す。

痴漢やら強引なナンパ男やらに**やりすぎ制裁**を加えているというおかしな女だ。

石井も彼女ともめたことがあった。

というか、喧嘩した。

誰もいない所でのタイマン。

絶対勝てるはずだった。

空手を習っているというような連中などいくらでも倒してきている。

だが軽くあしらわれた。

そしてその長く細い、それでいて妙に柔らかそうな足で股間を蹴り上げられた。

脛の辺りがズボリと股間に減り込んだ。

ゴチュリ、というような異様な音と、ズバスン、というような景気のいい音が同時に鳴った。

もちろん1発ノックアウトだが、倒れた石井を見下ろしながらその女はいった。

「今の感じは潰れなかったな。運のいいキ○タマだ」

今はナノテクノロジーで潰れた玉ぐらい治る。

それはいいことだが、だから逆に軽々しく潰そうとする人間が、特に自分についていない女の中から出てきている。

それを憂慮しても、今さらどうにもなるものではないだろう。

——あのキ印女、完全に潰す気で蹴ってきやがった。

蹴られた痛みと、恐怖でそれ以上ないほどに股間が縮み上がったのを覚えている。

今も、それと同じぐらいに縮んでいた。

「ねえ、デッカイチ○ポ、卒業までに見せてよ」

「私も見たい」

「私もぶち込んでよ」

振り払う。

熱心に誘われれば、一回ぐらいしてやるのも悪くない。

だがこの三人は無理だ。

抱けば、短小だと学校中に広められる。

最低限、そういうことをしない女しか抱いてこなかった。

そういうえり好みが出来るモテる男だった。

というか、普通男のその部分について他人に広める女は少数派だが。

適当にあしらい、三人と別れる。

彼女に電話をかけるが、繋がらない。

しかし大丈夫だ。

ストーカー応援アプリという、どう考えてもどアウトの名前のアプリをひそかに彼女の携帯に入れている。

ついでに、久美華にもだ。

そういうわけで、彼女の位置はわかる。

出ないだけで、電源は落ちていないのでわかる。

学校内にいた。

音楽室だ。

音楽というと、井上。

音楽で食えないから教師をやっているらしいのも、石井の癪に障った。

才能もないのにフラフラしているように見えるのだ。

それでなぜ癪に障るのかわからないが、石井はそういう他人にケチをつけるのが好きな男だった。

——そういや今日はいじめてねえな。

この一月、わりとどうでもよかった。

マリナのことで頭が一杯だった。

それで、マリナ本人とさえろくにコミュニケーションできなかった。

その分も、会いに行って話そうと思う。

音楽室。

戸を開ける。

と、中から声。

「あっ、あっ、いいっ、いいのお！」

押さえた甘い声。

しかし、聞き逃しようがない声だった。

——ま、マリナ……

信じがたい。

聞き違いだ。

そう思いつつも、足音を殺して音楽室に入る。

声は、準備室から聞こえてきた。

扉を閉めていれば、抑えた声でもあるから、聞こえなかつただろう。

「おマ○コいいっ、マリナのおマ○コごりごりしてええ！」

——な、なんだよそりゃ。

聞いた事がないおねだりだ。

道具でも使っているのか。

足早に、しかし音は消して準備室に近付く。

少し空いた戸から、しゃがんで中を覗く。

プルンプルン揺れていた。

汚い尻の下で、男の肉玉が。

——潰す。

マリナとやるなど、万死に値する。

それでも、治る玉を潰すだけで許すのだ、慈悲深いだろうと思う。

もちろん、その後でさらに償いを要求するのは当然だ。

戸を開けようと手を伸ばす。

立ちバックで、女に机に手を付かせている。

入り口に尻を向ける無防備な体勢で、女の姿は見えない。

——さて、アレはマリナか？

最後まで、信じがたい。だが、声はマリナ。そして自分をマリナと呼んでいる。

「マリナいっちゃうっ！」

「ま、まだ我慢して」

「先生の意地悪う、意地悪う！」

「うぐうう、片末のマ○コしまるっ……」

「マリナって呼んでよお！ あん、あん！」

「マリナ、マリナ！」

唇を噛む石井、血が出る。

——マリナだ、それに相手は……

井上だ。声でわかる。

一生償いをさせる。

そう思ったとき、二人が振り返る。体位を変えに動く。

「先生、エキベンして！」



「先生、エキベンして！」

「よおーし！」

「きゃああ！ 持ち上げられちゃった！ これ好きい！」

ヒュ、と石井の喉の奥が痙攣し、
笛のように音を鳴らす。

——あ、あんな体位求められたことない。

というか、短小の石井には不可能だ。

そして、石井が初体験だったマリナはそもそも

そんな体位知らないと思っていた。

井上に教えられたのか。いろいろと。

そう思うと目の前が真っ暗になる。

「よおーし！」

「きゃああ！ 持ち上げられちゃった！ これ好きい！」

ヒュ、と石井の喉の奥が痙攣し、笛のように音を鳴らす。

——あ、あんな体位求められたことない。

というか、短小の石井には不可能だ。

そして、石井が初体験だったマリナはそもそもそんな体位知らないと思っていた。

井上に教えられたのか。

いろいろと。

そう思うと目の前が真っ暗になる。

それを晴らすには、飛び掛るしかない。

井上を罵り、肉玉を潰すしかない。

が、動けなかった。

二人は振り返り、しかしまったく扉の隙間には気づかず、広い空間に向かってエキベンを開始する。

女の脚をV字に持ち上げ、体ごと上下して一物に対してピストンさせる男の体力がいる体位だ。

正面にいる石井には、二人の獣のように繋がった、肉と剛毛の交じり合った生殖器が丸見えだった。

マリナの若々しい色艶のいい花卉も、プックリ膨れた小まめも、薄い茂みもすべて見慣れている。

小まめがパンパンに膨れ、薄い皮から頭を覗かせている。

そこまで大きくなることを、石井は何度となく彼女を抱いているのに見たことがなかった。

どれだけ気持ちいいというのか。

一方、剛毛に覆われた井上の肉玉と、その上から生える男根。

——で、デケエ……

足がすくんだ。

井上のものは、先ほどのオタクたちのモノすら人並みにしか見えなくなるほど太く、恐らく長いこともピストンの動きの迷いのなさで石井には伝わった。

最愛の恋人が寝取られた。

それだけでも石井は目の前が真っ暗になり、相手を殺してもなかった事にしたくなるほどだ。

その上に、その寝取り相手の男根が自分の小物とは比べ物にならないのだ。

AVに、黒人のデカチ○が売りのジャンルというか種類もある。

大きいというのはどういうことか興味があり、石井は結構そういうのを見る。

自分のがそんな感じだったら、と想像しながら。

そのとき付いていたものより、井上のものは遙かに巨大だ。

——冗談じゃねえよ、黒人の巨根に寝取られどころじゃねえ……あいつらの中のデカイのより、こいつの方がデカイじゃねえか……

勝ち目ゼロ。

いじめていた相手に、パンツの中身では太刀打ちできない。

オタクたちならまだ、腹も立った、嫉妬もした。

ビデオの中の男優なら、自分のもそんなだったらと想像も出来た。

だが目の前で恋人の秘所に突き込まれているものはどうだ。

腹も立たない、嫉妬も出来ない。

自分についていると想像も不可能な異次元の巨モノ。

——なんだよ、これ。

身動き取れない。

ただ、恋人が他人とするエキベンを見ているしかない。

小ぶりだが、張りのいいオッパイを揺らして持ち上げられるマリナ。上下に動くたびに、ジュボジュボと巨根が音を立てる。

「おおおおおおおおお！ いい、いいわあ！ 彼氏の短小チ○ポじゃ入らない一番気持ちいい所ごりごりしてるうう！ 先生のおチンチ○いいのおおおおおお！ い、いくううううううううううううううううううううううう！」

「はあああ……」

呻いてしまう。

が、扉の向こうだ。マリナの絶叫と井上のうめきに誤魔化され、石井の声は聞こえない。

聞こえないと、石井は思った。

マリナの位置を下げ、巨根の根元までズブズブズブと減り込ませつつ、自分の腰の動きでそれを上下させながらふと、井上は扉が開いているのに気づく。

——なんだ、誰か覗いてるのか？

正直、学校内では誰にも重んじられることがない井上。

正常位でやっていれば、割り込まれかねない。

しかし、エキベンで正面を向いていれば別だ。

——この大物を見て、馬鹿にしては行ってこれる奴がいるか？

お気楽な公務員暮らしであることを除けば、何一つ人にぬきんでた部分などない井上。

風俗以外、女を抱いたこともなかった。

それが今、黒髪ツインテールの、学校一の美少女を抱いている。

誰だか知らないが、扉の向こうに人がいるのがわかった。

——見てくれよ、俺のデカチン。あのクソヤンキーの彼女にズッポリ行ってるぞ。

見つければ、ただでは済まない。

しかし、今この場で、自分の巨根で女をいかせていると底なしに自分が大きくなった気がする。

それについ、動きを続ける。

途中で気づく。

——この体勢じゃ俺の顔見えないな。

まあそれならそれで、割り込まれる可能性が減っていいか、と思う。

一方で、石井は震えていた。

前に出て怒鳴り散らせもせず、しかし「逃げる理由」などないから、下がれもしない。

そんな中途半端な自分の状況に気づいて、よく分からない理由で震えていた。

——なんでだ、何で。

自分より弱い相手の権利とか、立場を考えたことはない男だった。

それで許されるほど、身体能力も高いし人付き合いのやり方もわかっている。

わがまま放題で、学校カーストの最上位にたち続けてきた男。

それが今、学生時代から最下層で、今も教師でありながら、十歳以上年下の石井にいじめられている男に恋人を目の前で寝取られている。

それで、動きが取れない。

こういう状況に、まったくなれていない男だった。

逆なら、別だろう。

井上が寝取られる側なら、切れて部屋に飛び込み、石井の肉玉を蹴り潰し、悶絶して手を離れたことで女の体重で一物をへし折られた石井を絞め殺すぐらいするかもしれない。

弱者が、ついに一線を越えられて牙を向いた形だ。

だが、現状はどうか？

あらゆる意味で強者の男が、弱者に女を寝取られた。

普通なら、怒り心頭というところだ。

だが、そうならない。

完全に勝っているが、一つだけ劣っているからだ。

それは、男の部分。

——俺は、チ○ポがちいせえ……。

そこだけは、完敗している。

井上は、ただ隙を突いてマリナをレイプしたわけではない。

マリナは、どう見ても喜びに震え、痙攣している。

すべてで勝っている。

だからこそ、男の部分での完敗によって、すべてが覆された事になってしまう。

もしも他の部分がそれほど差がないなら、男の部分で完敗してもそれほどショックはないだろう。

他の美点で負けたと思える。

だが、井上に対してそれは考えられない。

——ただただ、チ○ポで負けて、寝取られた……

涙が溢れているのに気づく石井。

マリナを下ろし、机に乗せてズンズン突きはじめる井上。

彼女が落ち着いたので、自分も出して終わりという按配だ。

チラ、と扉のほうを見る。

——なんだ、まだ向こうの奴見てるな。もしかして、マリナが好きだったか？ ああ、そりゃそういう奴は多いだろうな、学校一の美少女だ。

そういわれている人間は五人ぐらいいるが。

と、日がかげり。

太陽の位置が微妙に変わり、音楽室の側の光の具合が変化した。

ギュ、と井上の肉玉が引きあがる。

「あ、あっ」

「先生、いっていいよ！ 今日気持ちよかったあ、彼氏の租チンと大違いよ！」

その彼氏が、井上の視界の中には入っていた。

——まずい、最悪だ……

殺されかねない。

巨肉根が縮み始める。と、ふと気づく。

——さてよ、あいつはずっとそこにいたぞ……

そして、よく見ればその顔が涙でぐしゃぐしゃだ。

膝立ちで、両手でこめかみの辺りを押さえ、苦悶の表情。

怒りより、苦しみといった様子。

井上の頬が弛む。

——おいおい、あいつ……俺の巨根見て心折れちまったんじゃないか？

「マリナ、石井と先生と、どっちのチンチ〇がいい？」

「えー！ 酷いよ先生、意地悪！」

桃尻に井上の腰がぶつかるパンという音。

振り返り、頬を膨らませるマリナ。

「カレーとウ〇コどっちがいいって、カレーが聞くようなものよ！」

「そうか、悪い悪い。でも遠くから見たら似てるね？」

「宇宙の反対側から見たらね。きゃははは！」

その笑い声は、何度も聞かせてくれたことを石井は覚えている。

今、石井の男の部分で糞扱いして、最愛の彼女がその笑い声を上げている。

腹の中に石井の子供がいるかもしれないと言っていた、彼女が。

——なんでこんな事に、何でこんな事に……

ほとんど性転換した気がするほど、石井の股間が縮み上がっていた。

「うっ」

「ああっ、熱いのでてる……一杯出てるよお」

「マリナ今日も可愛かったよ」

「先生もすっごかった。本気でいっちゃうもん、演技じゃなくてさ」

「彼氏のときは演技？」

「そういうことはいわないのがエチケットだよ。たまにはいったけど、先生とのいきかたとは深さや高さが全然違うわ」

パタン、と石井の手がこめかみ辺りから離れ、ひざ立ちの太股に当たる。そして床に。

もう泣いている感じでもない。

「それじゃ、そろそろ帰ろうか」

「帰ろうかって、もう三回もしたんだから、帰るでしょそりゃ」

「そうだったそうだった。じゃ、帰ろう」

石井がビクリと震える。

二人が出てくる。

寝取り男と寝取られ恋人が、寝取られ男が扉の向こうから見ていたと気づく。

——だめだ、気づかれちゃ……

被害者である寝取られ男。

それが、自分が何か悪いことをしたように、自分の姿を見せまいと慌てて立ち上がって走り去る。

「あれ？ 向こうに誰か？」

「オタクっぽい奴が覗いてたんだ」

「えー、覗きとか最悪！ オタクってなんか変なトコまじめなのがいい部分なのに！」

よく分からないことをいう。

わりと、そういう連中を認めているのかもしれない。

だから、井上のような男に妊娠したかもしれないと相談に来た。

もっと遊んでいそうな教師もいれば、女性教師もいる。

その中で、彼らにも見下されている井上の下に来た。

それは、オタクっぽいのは真面目だという考えが根っこにあるのかもしれない。

まあ、井上には関係ない。

学生時代もいじめられていたが、特にオタクでもなかった。

「じゃ、明日も？」

「もちろんですよもちろん。妊娠が間違いだったとわかった以上、遠慮もないですしね！」

ただの生理不順だった。

それでも、石井は逃げてしまったという。

「あ、彼氏から電話きてる」

「へえ、もしかしたら覚悟決めたのかも」

「覚悟？ あんな短小チ○ポの覚悟なんて知れてますよ」

愛し合っていて結婚したい、と相談してきたときに言っていた。

それがこの言動だ。

妊娠したといった途端一月ほど避けられては、そうなるかもしれない。

「妊娠もしてなかったし、もう終わり終わり」

不在着信に答えることなく、スマホをカバンに戻す。

「本当にマリナはいい子だね」

「褒めても何も出ませんよ。というか、三発も出したんじゃ流石に出して上げられませんよ？」

肩を抱き、歩き始める井上。

「あ、いいんですか？ だってあいつ……」

「まあ、そんなにおおっぴらには出来ないけど、多少は大丈夫」

——完全に、心が折れてたからな。まあ、追い詰めすぎないなら、もう大丈夫だ。

このまま、悪くない形で安定した形が続くと、井上は軽く思っていた。

確かに、石井にはもう打つ手がない。

元々高い能力に任せて生きてきた強者で、正面突破が難しい場面ではあまり役に立たない。

だが彼には、セフレの幼馴染、久美華がいた。

彼女は愛する石井のために、井上を陥れようと動き出す。

体験版終わり

楽しんでいただけましたか？

よろしければ、続きは製品版で。

この後、久美華も寝取られて、二人の前で負けオナニーという寝取られもの鉄板の展開になります。